

里中高志

Satonaka Takashi

illustration: Shigeyuki Sakata

ねぶたの行列が見守るなかで、孫の代まで続く「新しいまち」が胎動！

宮城県東松島市・東矢本駅北(あおい)地区(2015年◆平成27年)



宮城県東松島市の矢本運動公園。その中で仮設住宅が立ち並ぶこの広場に、今年も青森からねぶたがやって来た。獅子舞やゴスペル、津軽三味線といった出し物に続いて、満を持して登場した色鮮やかなねぶた。たこ焼きやさんまの屋台から美味しそうな匂いが漂う広場を出発し、夕暮れの道路を進み始めた。

震災の翌年の2012年から毎年続く矢本運動公園の「仮設住宅まつり」。その1年目から青森のねぶたを呼び続けている理由を、まちづくり整備協議会会長の小野竹一さんはこう説明する。

「ねぶたというのは、もともとは亡くなった方を慰霊するためのお祭りなんです。昔の灯笼流しが陸にあがったのが由来なんです。だから、大勢の仲間や家族を震災で亡くした私たちが、避難所を経て仮設住宅に入って、みんなで何かやりましょう、となったときに一番ふさわしいと思ったのがねぶただったんです」
先導する「跳人」が軽快にジャンプをし、人々の掛け声と太鼓の音が暮れなずむまちを染めてい

く。ねぶたに連なる人たちの胸にはそれぞれどんな思いが去来しているのだろうか。

青森選出の国会議員、津島淳氏は、青森が生んだ文学者・太宰治の孫でもある。毎年このまつりに参加している津島氏が話す。

「跳人というのは参加資格は何もいらない。誰でも入れるのがねぶたの良さなんです。こうやって歓迎してもらうことで我々もねぶたの力を再認識できる。そして、このまちでいま始まっている新しいコミュニティ作りは、地方創生のひとつのモデルケースになるのでは、と考えているんです」

「コミュニティはそのままだ」

東矢本駅前では、震災前は広大な田んぼだった土地が、580戸の宅地へと生まれ変わった。まちの名前も新たにあおい地区として宅地引き渡しがついに完了したばかり。

相澤美津枝さんもそのひとり。震災で娘のひとりやを亡くした相澤さんの新しい家は、娘さんが好きだったデイズニーのキャラクターを玄関や屋根にあしらった、特別

清水良祐はこう話す。

「被災した移転者からお願ひされたのは、一日でも早く移れるようにしてほしいということでした。私たちとしてもその声に応え、最終引き渡しを予定よりも4ヶ月早くできました。ほかに新しいまちで活動するためにいただいたご要望が、4つの公園にそれぞれ違う役割を持たせてほしいということでした」

春になれば花見のできるお祭り広場。健康遊具を設置したスポーツ目的の公園。夏には祭りができ、葉が落ちた冬にはイルミネーションを輝かせることのできる公園。そしてアメリカ製の木製遊具のある子どもたちの遊び場。顔も目的も異なる4つの公園は、まちな色合いをより多彩にするだろう。

「この新しいあおい地区には、災害公営住宅のエリアと、自力で家を再建した人のエリアが分かれているのですが、それぞれのエリアが分断されることのないよう、その境目には双方の人たちが交流できるように広場や公園を配置しているんです。皆が集まれるような構造になっています」(清水



「新しいところに来ましたが、近所は前から知っていた人ばかりなので安心感があります。あとは、もっと若い人や子どもたちの声が聞こえるまちになってくれればうれしいですね」(相澤さん)
運送の仕事をしている土門猛さんも、「これまで住んでいたコミュニティを大事にしたいからこそ、皆集団移転を選んでいきますからね」と話す。

新しいコミュニティをいかに自然に成り立たせるかこそ、小野竹一さんが一番腐心したことだった。だからこそ、小野さんは家の建つ場所を抽選では決まらず、580の全世帯をすべて話し合いで決めた。以前のお隣さんは新しいまちでもお隣さんに。こうして、震災前のコミュニティがそのまま継続されたまちが出来上がった。

所長)

仮設住宅まつりにも参加していた東松島市の阿部秀保市長がこう話す。

「復興に関しては、産官学民の連携というのが非常に大切だと思っております。これだけの大災害に対応するのに、行政だけではマンパワーが不足します。今回は予定よりも4ヶ月早く最終の引き渡しことができましたし、URさんにお願ひした私たちの選択は間違っていないと実感しています」
まちづくりを推進してきた小野竹一さんはこう話す。

「私たちは多くの方に助けられたおかげで仮設住宅を出て新しいまちに移ります。ここを日本一のまちにするということこそが、その人たちに對する私たちのお礼なんです」

何十年あとも人々の暮らしが変わらず息づくまち。ここで遊ぶ子どもたちが、大人になったときにもつながる営みが今日も続けられている。



東矢本駅北(あおい)地区を跳人が先導して練り歩く「ねぶた」

「新しいまちづくりについて、私たちは3年もの間、3日にいっぺん、1年で220回もの話し合いをしてきました。何もないところから始まるんだから、日本一のまちを作ることを目標にしているんです」
小野さんたちは様々な新しいまちのルールを作った。宅地と宅地の間は1・5メートル以上離す。道路面の塀は見通しの良い構造で高さ1・2メートルまで。そうすることで曲がり角で子供の事故が起きないように配慮している。そのため行政に働きかけて条例も

顔の異なる4つの公園

あおい地区の事業を一括して受託し、まちづくりの整備を担ったのがUR都市機構。この計画を担当した宮城・福島震災復興支援本部・東松島復興支援事務所所長の

街に、ルネッサンス
 UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
企画制作 新潮社